

# 実践総合農学会 ニュースレター

Society of Practical Integrated Agricultural sciences NEWSLETTER 第14号 2017年2月20日発行



長野県長和町一棄てられし畑の草刈る秋の午後

## 目次

ご挨拶にかえて—第 11 回地方大会を振り返って 実践総合農学会会長 三輪 睿太郎 . . .	3
実践総合農学会「長和町」地方大会に参加して 東京農業大学教授 濱野 周泰 . . .	6
第 11 回地方大会に参加して 長和町産業振興課長 金山 睦夫 . . .	7
第 11 回地方大会に参加して 長野県丸子修学館高等学校教諭 松澤 公夫 . . .	8
第 11 回地方大会に参加して 埼玉県 田熊 重利 . . .	9
第 11 回地方大会（長和町）に参加して 東京農業大学食料環境経済学科 余越 柊介 . . .	10
第 11 回地方大会に参加して —山村再生に取り組む若者の活動に期待する— 東京農業大学大学院 藤本 好彦 . . .	11
長野県長和町での地方大会を終えて（編集後記） 実践総合農学会事務局長 北田 紀久雄 . . .	13

表紙：三輪 睿太郎 作（実践総合農学会会長）

## ご挨拶にかえて—第 11 回地方大会を振り返って

実践総合農学会会長 三輪 睿太郎



2017 年初めてのニュースレターをお届けします。

第 11 回の地方大会が 11 月 12・13 両日に長野県長和町で行われました。長野県農政部、長和町、丸子修学館高等学校ほか多くの方々のご協力を得て充実した大会を開催することができました。心から御礼申し上げます。

大会を振り返って感じたことを申し述べてご挨拶にかえたいと思います。

長和町では連携協定に基づいて東京農業大学が山村再生プロジェクトを実施しており、本大会の基調講演者である国際食料情報学部食料環境経済学科立岩寿一教授が鷹山地区の荒廃農地の再生に取り組んでいる。また、この中で、丸子修学館高校との「高大連携」により、現場を活用した農学高等教育を実践している。

日本経済には地域の主体的な経済活動の振興が重要であり、その文脈で農林水産業を知識集約型産業として再生することが期待されている。

地域は生態系、風土、歴史によって育まれた「生活の場」であり、農林水産業はその上に発展してきたものであり、知識集約型産業としての農林業もその上に立つものでなくてはならない。

これまでの地方大会でも多くの議論が行われたように、ものづくりなど、地域がみずから行う努力（内発要素）だけでは展望が開けない。もの作りに関しても、①後継者を外部からの参入に求める、②資金を外部に求める、③販路を確保する、の三点において、国内の都市域、海外、異業種からの関心と意欲（外発要素）を取り込む必要がある。観光、休養、レクリエーションにおいては外発要素がさらに強くなる。

大会シンポジウムで株式会社日本ウオルナットの羽田義久氏から、クルミの殻を原料に楽器などの高級研磨剤や接着剤、タイヤ部材などを製造する企業の話があった。これらの用途にはピーナッツの殻などは使えず、クルミの殻でないと得られない。国産クルミの廃物利用から始まったが、用途が広がるにしたがって殻が不足し、現在、国産利用は 1%に過ぎず、アメリカ、中国から 1000 トンを輸入している。そこで良質な品種をカリフォルニアへ出かけて探索し、「チャンドラー」という品種に到達し、それを輸入し、試験栽培するのに苦労しているという。展望を開き、工業から農業へ業態を上げ、長和町に根を上げた産業にしたいという。

大会 2 日目の座談会ではアスパラマル株式会社の吉見雅史氏が 31 歳で後継者となって米から始め、アスパラガスの半促成・長期取りを 60 棟 2 ha の施設で栽培にまで発展させた話をした。

地域の今後を考え、家族経営から法人経営に切り替え、20ha のイネ、大豆、小麦作も営む地域の担い手となっている。

農夫と農婦の山崎努氏は今は珍しくなった紅玉の加工適性に着目し、一農園でまとまった量の出荷ができるのを強みにして、菓子、果汁、ジャム用に販売、安曇野ワイナリーにワイン原料も

提供、観光果樹園も経営している。

このように長和町の企業、農業者の「内発要素」には見るべきものが多い。内発要素のなかに日本ウォルナットにおける新用途開発、アスパラマルの独自ブランド発信、農夫と農婦の安曇野ワイナリーへの原料提供など、「外発」を味方につける努力がみられるのは当然であろう。

今回の大会では地域—大学連携が主題になったが、この仕組みは今後の人づくりに大いに貢献することができる。

これまで大多数の若者が高学歴を経てサラリーマンとなったが、サラリーマン界の格差拡大によって、多数派が低所得層に陥ることで、この楽な社会受容が急激に崩壊しつつある。かつて多くの若者を農村から奪った「気楽な稼業」が消えようとしている。

作家の橋本治が「乱世を生きる—市場原理は嘘かもしれない（集英社文庫）」でこの変革をていねいに描いている。以下、その受け売りである。

辞書を引けば、経済とは「人間の生活に必要な財貨・サービスを生産・分配・消費する活動。また、それらを通じて形成される社会関係」、とあるが、経済の{高度化?}の中で、いつの間にか前半の「経済とは人間の生活に必要な財貨・サービスを生産・分配・消費する活動」だけになり、世の関心が、「いくら儲かる?」、「何を買える?」だけになってしまった。後半の生産、分配・消費を通じて形成される社会関係」は忘れ去られてしまったのだ。本当は後半こそが重要で、カネやモノがどれだけ社会関係を良くしたかで経済は評価されるべきなのである。

座談会で話をされた(同) SMILE 結絆の尾美保氏は、作る+食べる=笑顔 が企業理念だという。この式をよく見て欲しい。左辺は、まさに辞書による「経済」の前半であり、右辺(笑顔)は後半(形成される社会関係)である。

尾美氏は、ロケーションとプライベート感を軸に耕作放棄地を大人の秘密基地のような自由空間とヒト・モノ・コトが触れ合うストーリーで再生したいと思っている。現在、このように考える人はあまりいない。それは我々があやまった経済感にドブプリと浸かっているからであり、将来を担う若者たちが、本来の「経済」感をもって生きるために尾美氏の考えは重要なヒントになる。大学生、高校生にとって長和町で行われている山村再生プロジェクトはとても効果的だと思う所以である。

地域あるいは農業の内発要因を豊かで強いものにするためには外発要因を取り込む必要があるとして、都市域、海外、異業種などを引き付けつつ、地域の体力をつくるためにはすぐれたオーガナイザーやコーディネーターが必要である。現実には市町村、あるいは農協がその役割を果たしているようだが、公務や組合の範疇から踏み込んだ活動や責任の継続性が必要になるため、独自の人材あるいは組織が求められている。長和町では(三セク)長和町振興公社を設立し、定住促進、保健・福祉などの向上に努めている。シンポジウムで講演した黒沢勇人氏は役場勤めを終え、現在は山村再生プロジェクトの現地指導員を務めるコーディネーターである。黒沢氏の話で印象に残ったのは目指す農村像に「経済一辺倒の生き方や思想に飲み込まれない社会」と「農とつながる人を増やすために農村移住者を応援できる社会」を挙げていることであった。さらに住民の心構えとして、「前近代を引き継ぎ、心を満たす時間や場所を創り出してゆくこと」をあげている。

役所の構想や計画にはあまり書かれないことであるがこうした「地域の意思」がとても重要ではないかと思った。

## 2016 年度実践総合農学会 第 11 回地方大会（長和町）プログラム

11 月 12 日（土）

### ◆基調講演

地方創生と大学連携－大学と地域の相互活性化を目指して－ 東京農業大学教授 立岩 寿一

### ◆シンポジウム－地域連携を通じた大学と地域の役割と課題

座長解題 シンポジウムのねらい 東京農業大学教授 両角 和夫

第 1 報告 「長和くるみ農園」－夢の実現に向けて－

株式会社日本ウオルナット代表取締役社長 羽田 義久

第 2 報告 ふるさとを守るために～住民の責任、プロジェクトの役割～

山村再生プロジェクト現地指導員 黒沢 勇人

第 3 報告 東京農業大学山村再生プロジェクトにおける高大連携の軌跡

－農大生と丸子修学館生徒による地域活性化の取組みを事例に－

東京農業大学助教 望月 洋孝

パネル・ディスカッション

11 月 13 日（日）

### ◇第 1 部 座談会－地域農業の取り組み

司会 杉原 たまえ（東京農業大学教授）

吉見 雅史（アスパラマル株式会社） 山崎 努（農夫と農婦） 尾美 保（合同会社 SMILE 結絆）

### ◇第 2 部 個別研究の成果発表

1. 丸子修学館高等学校の生徒による「課題研究」の発表 コメント 山田崇裕（東京農業大学助教）

・学校間連携事業の取り組み～地域連携から学ぶこと～ 松山 耕大

・長和町の特産品作りについて～地域連携から学ぶこと～ 谷山 遥菜・儘田 舞花・古川 真央

2. 実践総合農学会個別研究報告

### ◇第 3 部 ミニシンポジウム

農村地域との協働活動とその教育的効果・課題を考える

－東京農業大学学生・丸子修学館高等学校生徒による－

座 長：望月 洋孝（東京農業大学助教）

オブザーバー：金山 睦夫（長和町産業振興課長）

パネリスト：古屋 亮（公益財団法人山梨総合研究所主任研究員）

根岸 奈央人（合同会社 SMILE 結絆副代表）

東京農業大学山村再生プロジェクト学生委員会

丸子修学館高等学校生徒

## 実践総合農学会「長和町」地方大会に参加して

東京農業大学地域環境科学部教授 濱野 周泰



平成 28 年 11 月 12、13 日に開催された長和町での実践総合農学会地方大会は、特に個人的に興味深いことが多く参加させていただくことにした。平成 17 年に和田村と合併する前の長門町のスキー場によく通っていたことから懐かしさが湧き出たと同時に、宿泊先のアンデルマツにも興味があった。さらに最近、樹木や緑地の健康や管理のことで地方へ行き、本題が一段落すると地域活性化や地域再生などの話になることが多くなったことによる。

仕事先での質問が多くなり、専門外ながら地域の活性化とは何か、何を起爆剤にして地域を再生すればよいのだろうか？ということが、いつしか頭の片隅に残るようになった。関連の本や資料を見ることも多くなったが、これだということが見えないのである。地域活性化の話題になると通り一遍の会話で済ませ、具体化に向けて一歩踏み込むことに躊躇している。実践総合農学会地方大会に参加し、地元で活躍する人々の活動報告を聴講させていただくことで自らの考えを整理する切欠にさせていただこうと思っている。

地域の人々から地域活性化や再生について相談を受けたとき、その仕組みや方法などの理屈や理論は文献などで徐々に理解しているつもりである。しかし、その理屈や理論で実際に地域が活性化や再生するのかが気にかかる。理屈や理論を説明して実行を次の人に受け渡すことが理想であり、効率的であることは解っている。性格的なこととして方針や企画、計画を口に出した以上は、一定の成果が得られなければ引き下がれないということが心の根底にあると自己判断している。

これまでの情報や経験から地域活性化や地域再生について私見を述べさせていただきたい。まず、地域の活性化や再生は、学習に似ていると感じている。斯界の権威が方法論や理論を説明しても、それを受け取る人々が行動し経験によって新しい知識や技能、態度さらには行動傾向、認知様式などを身につける意識が無ければ、絵に描いた餅になると思う。地域活性化や地域再生の講演会場などで「理屈は解るが、上手くいくのか？」という意見をよく耳にする。講演の内容にもよるが、聞いたことを応用しようとする連想力があるかどうかという聴衆の姿勢にも課題があると思われる。地域の人々は、先導者の指針を推進力として活性化や再生に向けて邁進する行動力と考え方や方法論に同調して事の本質を洞察することが重要であると考えられる。

今回の大会で発表された、クルミの殻の活用に着目されて事業展開されている羽田氏の姿勢は、先見性と事業の方向性に優れられた先導者であると感じられた。また、リンゴ栽培の山崎氏は、生食が主体とされているリンゴやブドウを素材として酒類やその他の加工品造りへ展開されている、固定観念にとらわれない発想の豊かさが成功の鍵になっておられる。今回の大会で活動報告された方々は、考えたことを実行するキーマンとして素晴らしい素質をもたれていると感心させていただいた。地域の産業に根ざした発想の転換による事業展開を目の当たりにさせていただいた。

これからの地域活性化や地域再生の課題は、多くの先学が指摘されているように高齢化した地域構成者の方々を組み込んだ活動の展開である。地域の年齢の多様化を目指し若者の移住誘致などが行われているが、高齢化した人々が活動できる位置を確保することが重要であると考えられる。事業を成功させる鍵は、先導者の臨床対応による資源の見極めと地域の人々の情熱に満ちた信念を貫く行動力が各地域に共通している要素と考えられる。

## 第 11 回地方大会に参加して

長和町産業振興課長 金山 睦夫



平成 28 年 11 月 12～13 日にわたり、長和町において第 11 回地方大会が開催され、県内外から大勢の皆様にお集まりいただきました。

この度、当町にて本大会が開催されることになったことは、大会事務局である東京農業大学と当町が平成 20 年に包括連携協定を締結し、連携・協力を深めてきたことが大きいと思っております。

東京農業大学「山村再生プロジェクト」は国際食料情報学部を中心に、包括連携協定に基づき、長和町を拠点として、地域と大学生によるプロジェクトを実施いただいております。このプロジェクトの目的は「地域活性化の担い手を育成」することで、当町にて荒廃農地の再生や伝統・歴史文化の活用実習、自然資源、食文化の活用実習、地域再生プランニング実習を展開していただいております。当町のありのままを学生に触れてもらい、学生が感じた課題を地域の皆さんや行政職員等と話し合い、学生から地域活性化のカギとなる様々な提案をいただいております。町では、多くの提案の中から地域活性化につながるものがないか模索を続けているところです。最近では、特に特産品開発に注力いただいております。今後、「儲かる特産品」が提案され、地域の皆さんを巻き込んで事業化されることを願っております。

さて、学会 1 日目は、東京農業大学の立岩教授から「地方創生と大学連携—大学と地域の相互活性化を目指して—」というテーマでお話しいただき、続いて行われたシンポジウムでは「地域連携を通じた大学と地域の役割と課題」というテーマで地元事業者、農業者、大学それぞれから報告があり、その後関係者によるパネルディスカッションが行われました。

このように関係者が一堂に会し、地域活性化の取組について様々な立場から発言をいただくとともに、それに基づき報告者と会場内の参加者がディスカッションする場に参加させていただいたことは、地元にいるだけに見えていなかった地元の良さや課題に気づかされ、大変有意義でありました。

交流会では、「姫の会」のおかあさん達により、信州サーモン、りんご、地元野菜、アマランサス、キヌアなどを使った郷土料理のふるまいや、若手農業者が生産した米や果樹を原料とした日本酒やシードルの試食のほか、地元の「和田獅子太鼓」の余興などがあり、参加された皆様から大変好評をいただきました。

2 日目は、町内の農業を背負って立つ若手農業者 3 名から地域農業の取り組みと題し座談会を行い、それぞれの持つ課題や農業経営の現状と今後の展開等について生の声を聞かせてもらうことができ、行政として今後どのような支援ができるのかなど、改めて深く考える機会となりました。

この後は、東京農業大学と連携を締結している丸子修学館高等学校の生徒さんによる課題研究の発表や学会会員による研究発表が行われました。発表者の皆さんが参加したミニシンポジウムでは、農村地域との協働活動とその教育的効果・課題を考えると題し、パネリストに山村再生プロジェクトの OB や山村再生プロジェクト学生委員会の学生、丸子修学館の生徒をむかえ、意見交換を行いました。私は、行政の立場でオブザーバーとして参加し、地域の課題を具体的に紹介し、高校や大学に求めること、東京農大教育支援協議会の開催していることや東京農大からの提案に対して役場横断組織をつくり対応していることなど、行政としての取り組みを紹介させていただきました。

今大会の成果を生かしながら東京農業大学との連携のもと、地域活性化に更なる取り組みを行っていきたくと考えております。

## 第 11 回地方大会に参加して

長野県丸子修学館高等学校教諭 松澤 公夫

2016年長野県長和町で開催された実践総合農学会第11回地方大会に参加した報告をさせていただきます。丸子修学館高校が、東京農業大学との「山村再生プロジェクト」に参加して4年目を迎えました。その間、2012年に教育協力協定を結んだ東京農業大学国際食料情報学部食料環境経済学科には多くの連携を行わせていただき、そのような縁で大会にお誘いいただきました。

本校は、総合学科という科で自分の将来を考えた科目選択をします。その中で特に地域との連携に力を入れており、それぞれの分野ごと特徴ある地域連携を実践しています。以前は「丸子実業高等学校」という校名でしたが、現在の総合学科として校名が変わったのは10年前です。現在でも、地域からは「丸実」「実高」と以前の校名で呼ばれることがあり親しまれています。

今回、行われた実践総合農学会は初めての参加で研究成果発表を依頼された時に「発表する実績もないでしょうか」と頭を抱えていたところ、大会事務局より「ありのままでいい」というお言葉をいただきました。この学校は地域に支えられており、普段実践している地域との結びつきを発表しようとサブタイトルに～地域連携から学ぶこと～を入れました。

発表内容は農業分野を選択した生徒が最初に行う「小学校との連携」と「長和町との山村再生プロジェクトからテーマを設定した内容」でした。地域連携もはじめからうまくいくことはありません。小学校との交流も準備・段取りをしても想定外のことが起きます。このようなアクシデントにどのように対応するかによって成長が図られます。授業では、寝てばかりいた子が何回目かの交流で意欲的に取り組む姿が見られることがありました。

発表中は生徒の緊張も相当なものでしたが、今回の経験が自信につながっていくと思います。学んだこと（インプット）をいかに人に伝えることができるのか（アウトプット）というコミュニケーション能力が求められますが、このような機会を経験することで養われてきます。また、「ジャムの試食アンケートのサンプルがないと卒業が危ないぞ!!」と生徒にプレッシャーを与えていましたが、夜の交流会では丸子修学館の先輩方に率先して試食を行ってもらいたくさんのデータを収集できました。（さすが、丸修の先輩たち!!）。この場を借りてご協力いただいた皆様方に御礼申し上げます。生徒も「卒業できそう」と胸をなでおろし喜んでいました。

2日間を通しての大会は東京農業大学の立岩寿一教授の基調講演で始まりしました。長和町を例にして地域で抱える問題、さらに現在の大学の現状と大学と地方との関係について講演がありました。その中で印象に残ったことは、大学では今後どのように地域連携をすすめていこうかと模索しているようですが、これは決して大学ばかりではありません。高校・中学・小学校と世代を超えた地域との連携及び校種間の連携も必要になってきます。人間関係が希薄だといわれる現代では大切なことだと感じました。

また、シンポジウムや座談会で地域農業での実践を聴講することで、授業ではなかなか聞くことがない現場の方のご意見を聞くことができ、とても有意義な経験となりました。

最後に、実践総合農学会の今後の活動がますます発展されますよう祈念して報告とさせていただきます。



丸子修学館高等学校発表者  
本人：写真右上

## 第 11 回地方大会に参加して

埼玉県 田熊 重利



平成 28 年 11 月 12 日（土）・13 日（日）の 2 日間、長野県小県郡長和町の長和町和田コミュニティーセンターを会場に、実践総合農学会第 11 回地方大会が行われ、私も会員として参加させていただいた。

長和町と東京農業大学は、山村再生プロジェクトを通して、地域と大学との包括連携協定を結んでいる。私はこの「山村再生プロジェクト」について、東京農業大学内や出張授業等で聞いたことはあったが、実際、その協定地における発表等であることであたいへん楽しみにしていた。私は参加させていただき、「想像以上のものであった。」というのが実感である。

開会行事に次いで連携事業の立役者である立岩寿一教授の基調講演に始まり、シンポジウム「地域連携を通じた大学と地域の役割と課題」における 3 名の方々の報告とシンポジウム、日を改め、杉原教授を司会とした長和町の農業者 3 名の方々と座談会「地域農業の取り組み」、時間を並行して行った 3 名の学会会員の個別研究報告とミニシンポジウム。それぞれが時間いっぱい学会名のとおりの実践した総合的な農学の研究、実践報告、議論であった。

私は、特に印象に残った 1 日目のシンポジウムについての参加報告をさせていただく。

第一報告者 羽田義久氏（株式会社日本ウオルナット）

「地方の零細企業」と謙虚に始まりながら、くるみ殻を使用した世界に誇る優良企業の社長である。くるみを自社栽培し、農園を作ろうという壮大な計画と実践について熱く語っていただいた。ユーモアも交えつつもその並々ならぬ苦労は伝わり、会社や町を自然に応援したくなる内容であった。

第二報告者 黒沢勇人氏（山村再生プロジェクト現地指導員）

爆発的な羽田社長の報告の次でさぞかし報告しづらいただろうと思いきや、冷静に、それでいて説得力のある語り口で、農民文学賞を受賞したという氏の、実践報告ながら、どこか文学的な報告であった。私が特に印象に残ったのは、「大学が『稲のことは稲に聞け、農業のことは農民に聞け』という初代学長の教えが受け継がれ謙虚な姿勢であったため指導員を引き受けた。」ということだ。時代が変わり、人が変わっても教育理念は受け継がれていくものと確信をもてた報告にさせていただいた。

第三報告者 望月洋孝氏（東京農業大学）

山村再生プロジェクトの背景、道のり、現状、意義等について、正確に、今後の課題も含めて報告いただいた。若き青年研究者という言葉のあう、氏に言われたら大学生も「やってみようか。」という気をおこさせるようなお人柄を発表から感じ取れた。

パネルディスカッション

報告のあった 3 名と座長の両角和夫教授を壇上に報告をもとにパネルディスカッションが行われた。両角教授の言葉にあったように「まず、人選が素晴らしい。」と私も感じた。これは企画立案された事務局に敬意を表したい。この 3 氏のそれぞれの立場で、この事業、町と大学との良好な関係がわかる報告とディスカッションであった。この連携事業の背景にはいろいろな人たちの思いや計画と実践があり、並々ならぬ努力があり、大学と地域の相互活性に結びついているものと思った。

長く、永久的に東京農業大学と長野県長和町との関係が続くようお願い、この学会地方大会への参加に感謝しつつ、私からの参加報告としたい。

## 第 11 回地方大会（長和町）に参加して

東京農業大学食料環境経済学科 3年 余越 柊介



実践総合農学会第 11 回地方大会（長和町）に参加させていただきました。東京農業大学食料環境経済学科に所属する余越柊介と申します。この度、ニューズレターの誌面をいただきましたので、僭越ながら簡単な自己紹介と本大会に参加した感想を報告させていただきます。

私は、食料環境経済学科が実施している「山村再生プロジェクト」の学生委員会に所属しています。このプロジェクトは、長和町をフィールドとした地域再生・活性化の担い手育成教育で、実際に耕作放棄地と伝統文化の再生、さらには特産品開発を行なっています。学生委員会はそれらを主体的に取り組む団体で、自分たちで課題を見つけ解決することに挑んでいます。

そして、今回、山村再生プロジェクト学生委員会を代表して、大会 2 日目のミニシンポジウムでプロジェクトの活動報告をさせていただきました。それに対して、パネリストの古屋さん（公益財団法人山梨総合研究所主任研究員）、学生委員会の OB でもある根岸さん（（合同会社）スマイル結絆副代表）、オブザーバーの金山さん（長和町産業振興課課長）から激励のコメントをいただき、これからも精進していきたいと思いました。

また、古屋さんのお話の中での「地域住民の誇りを持った生活が活性化をよぶ」という言葉が印象に残っています。活性化というのは、外部からの働きかけがあっても、内部からの動きがなければなり得ない、ということを確認させられました。ただ大学から町に提案するのではなく、町と一緒にやっていかなければならないと強く思いました。他にも、東京農業大学と連携協定を結んでいる、丸子修学館高校の生徒から立派な報告があり、大学生として負けていけないと思うとともに、一緒になって長和町を盛り上げていこうという気持ちになりました。

ミニシンポジウムへの参加だけでなく、初日の基調講演やシンポジウム、2 日目の地域農業の取り組みも聴講させていただきました。それを通して感じたのが、実学の大切さです。大学内での座学はもちろん大切ですが、現場を知らなければそれは生きてきません。今大会で、現場を知る方々のお話を聞くことにより座学がリンクし、それによりさらに座学を勉強する意欲が湧いてきました。また、その実学をまさに体現しているのが山村再生プロジェクトであると自覚し、より一層活動に励んでいきたいと思いました。

今回、実践総合農学会第 11 回地方大会（長和町）に参加させていただいたことで、自信が湧いたとともに、モチベーションが向上しました。このような機会に巡り合えたことに感謝して、これからにつなげていきたいです。

## 第 11 回地方大会に参加して －山村再生に取り組む若者の活動に期待する－

東京農業大学大学院農学研究科農業経済学専攻 博士前期課程 藤本 好彦



本学会の開催地である長和町は、若者が都市部に移動し続けた結果、人口減少社会に突入している。国立社会保障・人口問題研究所の調査(2013)によれば、2010年の若年女性人口がおよそ500人で、30年後には200人を割り込み、消滅する可能性の高い市町村に位置付けられている。このような指摘がある一方で、若い人たちが中心になって長和の地でいろいろな活動が展開されており、ふれあいの芽がよきよきと出てきている。今後はその芽が点から面へと広がり、都市部から長和町にどんどん若者が移住し、若い人たちの発想で新たな故郷へと展開する姿が浮かんで来ることを期待している。

そのような地域環境にある自治体で、実践総合農学会が開催される意義はきわめて大きい。今大会では特に、①長和町の青年農業者の実践報告、②丸子中央小学校児童と丸子修学館高校生との取り組み報告、③丸子修学館高校生と東京農業大生との協働活動の報告は大変に興味深いものであり、以下に報告したい。

### (1) 長和町の青年農業者の実践

長和町の青年農業者の実践として、吉見氏や山崎氏、尾美氏の報告があった。吉見氏は福祉施設に勤務していた経験を持ち、大豆や小麦、水稻の栽培や作業受託も積極的に引き受け、現在は稲作経営と長和町が「アスパラの森」と呼ばれるように、アスパラガスを栽培している。山崎氏は、工業系の学校へ行き、卒業後はスキー場でインストラクターとしても活躍しながら、水稻経営と、贈答や加工、自家消費や観光農園など多様な販売に取り組みリンゴとブドウを栽培している。尾美氏は、「先人が築き守り続けてきた日本の財産である農地が、耕作放棄地になってゆくのを見てはいられない!」と、16年間勤めた長和町役場を退職し、現場に飛び込み仲間と起業し、50種類以上の野菜の栽培や耕作放棄地の復旧活動を展開している。以上の報告者は、これまで続いた、長和町からの若者の流出に歯止めをかけ、将来故郷が寂しくなってゆくのほうっておけない!という高い志を抱き野良に飛び込んだものである。

### (2) 丸子修学館高校生徒の取り組み

総合学科である丸子修学館高校は、「進学する」や「就職する」を決めるのではなく、「人間力」を養うことができ、将来において地域社会に貢献できる人材の育成を目指している。その中

で、①人としての成長を目指すこと、②学んだことを明らかにすることを目的に、「農業と環境」を選択した生徒が、高校の圃場を利用して、丸子中央小学校児童に農業教育を実践している。そして、児童との米や野菜の農作業体験や食事会を通して、収穫した時の「喜び」や「食べ物のありがたみ」を感じたこと、さらに環境省のレッドリストで準絶滅危惧種として記載されているアカハライモリ (*Cynops pyrrhogaster*) や、ゲンジボタル (*Luciola cruciata*) などの多くの生物が、長和の自然の中で暮らしていることを認識している。

### (3) 丸子修学館高校生と東京農業大学生との連携

丸子修学館高校の生徒は、東京農業大学の学生と、長和町内の農業経営者のもとで農作業の実習を行い、長和町に伝わる伝統行事へ進んで参加し、長和の今ある課題やこうなしてほしいと願う気持ちを具体的に提案している。一例として、長和町内には水稲と野菜栽培に取り組む多くの農業者が廃棄部分の有効な利用はないものかと悩んでいたところに、廃棄される部分を使い玉ねぎやトマト、なす、米のジャムづくりを開始した。両校の学生・生徒は将来、長和町の特産品とするため製造開発に力を入れている。今後は廃棄農産物の有効活用のモデルを構築したうえで、地域に対して廃棄農産物の利用方法や製造技術を還元することが目的となっている。そして将来は、農業高校として完成した商品について国際商標の登録を行い、外国に販売を推進させ、その過程で再び地域に、楽しんでできる農業を還元したいと希望を持つなど、今後の研究がとても期待される。東京農業大学は高等教育や研究のための組織であると同時に、長和町民の山村生活を支援する基盤的環境の形成に貢献する存在となりつつある。今後は、長和町民にさらなる開かれた生涯学習の場の提供が進み、長和町と創造的な関係を結び、長和の知(地)のプラットフォームとしての役割が一層期待されると思う。

### 参考文献

増田寛也『地方消滅』中公新書(2014)

## 長野県長和町での地方大会を終えて（編集後記）

実践総合農学会事務局長 北田 紀久雄



本号は、平成 28 年 11 月 12 日（土）～13 日（日）に長野県長和町で開催された 2016 年度第 11 回地方大会の参加者からの寄稿をもとに構成されています。

長野県の中央に位置する長和町は、平成 17 年 10 月 1 日に長門町と和田村が合併して誕生した町です。合併当時の平成 17 年国勢調査人口は 7,304 人でしたが、平成 27 年には 6,170 人に減少し高齢化も進んでいます。豊かな山林に恵まれた中山間地域である長和町は、かつては農林業が中心でしたが、現在では第 2 次・第 3 次産業従事者が増加し、町外に通勤する人が多くなっています。

長和町では、町域面積の 93.3%が林野や原野等であり、農地は 10.08k m<sup>2</sup>、5.5%に過ぎず、典型的な山村地域です。歴史的には、古代の人々が発掘したとされる黒耀石、中山道宿場町の面影が残る長久保宿と和田宿等があり、美ヶ原高原、長門牧場、スキー場等の観光資源もあります。農業生産としては、特産品の研究開発に取り組み、「ダツタンそば」が長和町推奨特産品第 1 号に指定されています。また、農業の憩いや癒しの効果を都市住民との交流に活かそうとグリーンツーリズムにも力を入れています。

このように、美しい自然と伝統的な地域資源、魅力的な暮らしをさらに次代に伝えるためのまちづくりに精励している長和町において、地方大会を開催することに決まったのは、いくつかの要因があります。まず、長和町と東京農業大学は、平成 20 年に包括連携協定を締結しています。また、長和町では東京農業大学国際食料情報学部（食料環境経済学科主体）が平成 20 年から山村再生プロジェクト（地域再生・活性化の担い手育成教育）を実施するとともに、同学部食料環境経済学科が平成 25 年から農地再生プロジェクト（町内鷹山地区の荒廃農地の再生）を実施しており、年々それらの取り組みが強化され、相互の信頼関係が醸成されつつあるという、東京農業大学との深い関わりや絆が存在していることです。

これらの取り組みは、東京農業大学が長和町役場との信頼関係のもと、現地の生産者（農家・農業法人）を初めとする多くの町民や企業・関連組織の支援を受けて実施しているもので、それにはいわゆる産学官の連携関係が構築されています。しかも、そのプロジェクト活動を通じて、町内の荒廃農地が再生され、それらの農地を利用して町の特産品の開発や普及が進むなど、地域連携に一定の成果も上げられつつあり、これは大学の社会貢献活動としても注目すべき取り組みと評価できるでしょう。

今回のシンポジウムでは、この長和町での地域連携の実践活動を通じて得た相互信頼関係や成果、問題点を踏まえ、農山村地域の産学官による地域連携のあり方を探ることをねらいとして開催されました。

今回の地方大会は従来の地方大会と異なった特徴の一つとして、従来のプログラムに加えて、新たにミニシンポジウムを開催したことにあると思います。ミニシンポジウムでは、大学側で山

村再生プロジェクトを実質的に担当している望月洋孝先生を座長として、そのプロジェクトに参加している東京農大生と丸子修学館高校の生徒がパネラーとして登壇していただきました（他に、アドバイザーとして山梨総合研究所主任研究員の古屋氏、長和町産業振興課長の金山氏も）。このプロジェクトは、参加者が山村地域である長和町での様々な実習体験を通じて山村の実相を探るとともに、地域を活性化する糸口や手法を学ぶという教育プロジェクトとしての意義を有するものです。その一方で、これは教育プロジェクトであるものの、そうした若者が地域で様々な形で活動することで、地域の住民や組織に多くのインパクトをもたらしたように思われました。

立岩寿一先生は、基調講演において地域創生・活性化のポイントとして、地域の「誇り」を取り戻すことが重要であると指摘されましたが、まさにこれは人材育成にも当てはまることではないかと感じた次第です。教育の重要な目的の一つも、生徒たち・学生たちが「誇り」を持って活動し社会に巣立っていくことにあるのではないのでしょうか。教育目的で始まった山村再生プロジェクトは、一方では地域創生にもつながり、地域創生の取り組みは人材育成や教育効果の向上にもつながるといって、相乗効果を発揮してきているように感じました。まさに、産学官の連携とは、そうした地域づくり・人づくりを通じて、それに参画する多くの皆さんがいろいろな意味での「誇り」を取り戻す活動ではないかというようなことを痛感した次第です。

また、長和町を中山間地域として抽象的一般的に評価しがちであることを改めて反省し、多くの新しい芽が育ちつつあることを実感した大会でもありました。今回の地方大会におけるシンポジウム、ミニシンポジウム、若手農業者座談会、高校生研究発表が、今後の長和町の活性化や東京農業大学などとの産学官連携の発展に少しでも貢献することができたら幸いに存じます。

地方大会開催に当たりましては、長和町町長の羽田健一郎様はじめ、長和町役場職員の皆様には大変にお世話になりました。特に、長和町で学会開催をご担当いただきました教育課長の藤田仁史様には大会の企画から会場準備までご尽力をいただきました。交流会では、地元ペンションのお母さん方の心のこもった郷土料理を堪能することができました。パネリストをはじめとして今大会を陰に陽に支えていただきました関係の皆様は心より感謝を申し上げます。

大会に際して、若干残念だった点は、大会に参加した学会員がやや少なかった点です（学会員による研究発表課題も3題に止まりました）。これには、開催時期や開催地の交通条件などの影響もあったかもしれませんが、やはり大会を企画した事務局の力不足、魅力あるイベントを企画できなかった点に問題を残したといえると思います。その意味では、学会事務局機能をいかに強化するか、より多くの学会員が大会の企画や運営に携われる体制づくりが必要であるように思います。もう一点は、地元の意向を踏まえたシンポジウムのテーマや地元の演者が数多く登壇する大会であったにも関わらず、地元長和町の参加者が少数に止まったことです。これは、先の企画やテーマ性の問題もあると思いますが、同時に地元への広報活動がやや不十分であったこともその一因であると思われます。今後の地方大会には是非とも地元の皆様がより興味を持って参加するテーマ設定とともに、地元と連携した広報活動をどのように展開するかも課題であると思います。

最後に、本号に寄稿していただいた多くの皆様に感謝を申し上げますとともに、このニューズレターを通じて、地方大会の良さが伝わり、多くの会員が学会活動や地方大会に関心を持って積極的に参加されることを期待したいと思います。



シンポジウム パネル・ディスカッションの様子



座談会 司会と話題提供者



丸子修学館高等学校 発表者



ミニシンポジウム パネリスト

---

## 実践総合農学会「ニュースレター第14号」

発行日：平成29年2月20日

編集責任者：実践総合農学会事務局長 北田 紀久雄

学会問い合わせ先：実践総合農学会事務局

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1 東京農業大学総合研究所内

TEL：03-5477-2532 FAX：03-5477-2634 E-mail：nri@nodai.ac.jp

<http://www.spia.jp/>

---